

式 辞

今年は春の訪れが遅れ、加えて先日は台風のような嵐に襲われましたが、大学構内の桜は、皆さんの入学を待っていたかのように、昨日、一斉に花を開いてくれました。本日ここに、新入生の皆さんを迎えて入学式を挙げていきますこと、心よりお慶び申し上げます。

本年、埼玉大学に入学した人は、教養学部172名、教育学部500名、経済学部351名、理学部217名、工学部463名で、これら5学部をあわせて1,703名になります。この他に、3年次に編入学した人が63名います。皆さんの多くは20歳前の若者であります。社会人として生きるなかで抱いた問題関心を胸にして、大学の門をくぐった人もいます。また、アジア地域を中心に世界各国から留学してきた人達も42名含まれています。皆さん、入学本当におめでとうございます。また、ご参列いただきましたご家族の方々にも、心からお祝いを申し上げます。

つい1年前のことになります。3・11(3月11日)に東日本大震災が発生し、それに福島第1原子力発電所の事故が重なって、筆舌に尽くしがたい、すさまじい惨禍をもたらしました。その事態を受けて、本学も昨年度は入学式を中止せざるを得ませんでした。ここに集われた皆さんの中にも、家族を、友人を、知人を、あるいは家を失われた方がいらっしゃると思います。警察庁の発表によると、本年3月11日現在で、地震と津波で亡くなられた人は15,854人、行方が不明の方は3,155人にのぼっているのです。被災された方には、いまなお悲しみと苦労が続いています。

政府は原発事故について、昨年12月、原子炉が冷温停止状態に達したと判断して「事故収束」を宣言しましたが、除染や事故原発の廃炉、さらに放射能汚染の影響が完全に消えるまでを考えると、事故の解決にこの先何世代を要するとも知れない状況であり、そのことが福島の人々に地震や津波とは別種の苦しみを強いることになっています。故郷が高濃度の放射性物質で汚染され、多くの人々が家に帰ることも許されない状態に置かれているのです。子供の健康を考えて、あるいは復興への希望をもてずに、県外に転出する人も後を絶ちません。総務省によると、福島県から県外へ住民票を移した人は、昨年1年間で53,122人にのぼるといいます。

この場を借りて、被災された方々に改めて心よりのお見舞いを申し上げます。

さて、このような大惨事を経験したことで、被災者はもちろん、被災しなかった人にも、モノやお金よりも家族や友人との繋がりを重視する、人間関係を大事にするという、価値観が広がったと言われていています。震災半年後に高校生を対象に実施された調査結果によりますと、高校生の5割以上が「お互いに助け合って生きることの大切さを強く感じるようになった」、「どんな厳しい状況でも生き抜く力が必要だと思うようになった」、

「家族や友人など、身近な人の大切さを感じるようになった」などと考えており、「日本人の生き方や、社会のあり方を変えていく必要を感じるようになった」、「社会に貢献したいという気持ちが強まった」という高校生も3割台から4割台を占めています。これは被災しなかった人を含む全国の高校生の数値です。この数値は、震災を契機に芽生えた高校生の価値観の大きな変化を物語っていると言わなければなりません。

また、高校生から大学進学希望者だけを抜き出して、大学生活や大学での学びについて集計した結果を見ますと、「大学生活を無駄に過ごしてはならないと強く感じるようになった」と答えた人が全国平均で42.9%、「大学で学ぶ目的について真剣に考えるようになった」人が31.7%、「社会や人の問題解決に直接役立つ学問分野への関心がいっそう高まった」人が25.5%、と高い数値を示しています。

この調査が行われた時点では、皆さんも、おそらく震災を機に大学入学後の生活や学ぶ目的を真剣に考えようとする高校生だったでしょう。そして、このたび埼玉大学への入学を果たしたわけです。私は、そういう皆さんがこれから卒業するまでの4年間、本学のキャンパスで充実した学生生活を送っていかれることを、期待します。

皆さんは今日から本学で学生生活を始めることになりましたが、種々予想していなかったことにぶつかるに違いありません。本学には脳科学融合研究センターや環境科学研究センター、アンビエント・モビリティ・インターフェイス研究センター、地圏科学研究センターなどがあり、埼玉大学が最先端の研究課題に取り組んでいることや、世界的な研究成果をあげている先生が少なからずいることは、入学して初めて気がつくことでしょう。また、埼玉次世代自動車環境関連技術イノベーション創出センターを置き、産学官共同研究を活発に行っていることや、日経トレンディーネットの「地域社会・文化への貢献」というイメージ項目で2年連続で首都圏第1位となったことも、皆さんがあまり知らなかったことだと思います。柔道やダンス、将棋、アカペラなど、学生諸君のサークルも全国レベルで活躍しています。

他方、思いもしなかったことに戸惑うこともあるでしょう。大学における「学び」もその一つだと思います。本日は皆さんの学生生活の開始を記念する日でありますので、大学における「学び」について、少しお話ししておきたいと思います。

皆さんも感じているでしょうが、日本語の「学び」という言葉にはどこか受動的な響きが付きまとっています。それは、受験勉強という形での「学び」の姿を反映しているからです。高校までの「勉強」は、「正解」が一つある問いがあらかじめ用意されていて、その「正解」にもっとも効率的に到達するための知識と技術を教わること、と言えば皆さんには分かり易いでしょうか。そういう「勉強」の仕上げが大学入試だったわけです。

しかし、大学における「学び」はそのような「勉強」とは異なっています。大学では問題や課題そのものがどこにあるかを発見することが重要になります。そして、それをとことん考え抜いて解を見つける、そのことによって世界が違って見えてくる、それが

大学における「学び」の醍醐味です。このことは、自然科学と社会・人文科学の別や、所属の学部、学科を問わず、変わりません。

大学におけるこのような「学び」は、一つ一つの講義の場でも求められますが、その仕上げになるのが、各学部に設けられている卒業研究・卒業論文です。卒業研究では、それまでの「学び」の積みあげを生かして、自分で「問い」を立てるところから始まります。これがテーマ設定です。そして、徹底して調べ、考えぬいて自分なりの解に到達する。それを文章表現して論文に仕上げる。出来不出来はあるにしても、このように自ら問いを立て、論文という形で自分を文章表現する「知」の営みは、とてつもなく大事なことです。その営みはもう「学問」と言って良いでしょう。「問うを学ぶ」と書いて「学問」となる所以です。

もう一つ、大学における「学び」と高校までの「学び」とで、異なることがあります。大学入試の問題とは違って、大学で行う「学問」には、「正解」がない問題もあれば、「正解」が複数ある問題もあるということです。それが「学問」のやっかいなところであり、また面白いところでもあるのです。これから皆さんが生きていかなければならない世界、3・11後の世界そのものも、今後のあり方についてはさまざまな選択肢がありうる、言い換えるとさまざまな「正解」がありうる、その中で人が選択して道を切り開いていかなければならない時代と言わなければならないでしょう。それを考えようとして格闘する、そしてさまざまな物の見方や考え方に出会う。「学問」には、そういう過程が重要なのです。皆さんは、大学の授業に出るようになると先生が「答え」をなかなか教えてくれないことに、戸惑うことになると思いますが、それは大学での「学び」が過程を重視しているからなのです。大学には、皆さんがこれまで出会ったことがないような知識が膨大に蓄積されています。そして、大学は、教育をとおして、その内容を皆さんに提供しますが、皆さんは、与えられた知識や情報を単にためこむだけではなく、じっくりと考え、自分にはないものの問い方、見方、考え方を学び取ってほしいと思います。

こう見てきますと、皆さんの頭に「学問に王道なし」という言葉が浮かんでくるのではないのでしょうか。この言葉は、幾何学を簡単に修得する方法を知ろうとするエジプト王プトレマイオスの問いに、数学者ユークリッドが「幾何学に王道なし」と答えた故事に由来するとされるもので、「学問」を修めるには国王だけに許されるような安直な方法はない、という意味です。そもそも「学問」とは、自ら苦勞して習得していく他ないものなのです。

大学における「学び」、それは「学問」だということは分かって頂けたでしょうか。そこで、そういう「学問」をするために、皆さんに是非心がけてもらいたいことがあります。読書です。本には、時代を超え、地域を越えた、多様な知識が埋め込まれています。読書するということは、そういう知識の宝庫の扉を自分で開こうとする行為に他なりません。かつて、大学生＝読書する者、と言われていました。講義で使用されるテキ

ストや参考文献だけでなく、古典とされる本や話題になっている本にチャレンジして下さい。そのためには大学の図書館がきっと役に立つでしょう。今、埼玉大学の図書館には約80万冊の図書が収められています。これまで留学生の皆さんに必要な図書が手薄でしたが、その改善のために数百冊を購入して、書架に並べてもらいました。どうか、活用してください。

とは言え、皆さんの中には、たくさんある本の中から何を選んで読めばいいのか、わからないという人もいるでしょう。そこで、本日はまだ講義が始まっていませんので、大学生らしい読書の入門編として、ジャンルの異なる三冊の本を、私から新入生の皆さんに紹介したいと思います。その一つは、『茂木健一郎の科学の興奮』（日経サイエンス社）という本です。この本は、テレビでも大活躍の脳科学者、茂木さんの『日経サイエンス』誌上に掲載された対談シリーズに基づく本ですが、茂木さんが12の研究現場に立会い、研究者とのやり取りを通して、科学の醍醐味を伝えてくれています。このやり取りが楽しく、自然科学の高度な知識が無くても読めますので、文系の人にもお勧めです。

二冊目は、『武満徹 エッセイ選』（ちくま学芸文庫）です。武満さんは、「ノヴェンバーステップス」という曲で世界中の音楽愛好家に知られる現代音楽の大作曲家ですが、彼は名文家でもあり、たくさんのエッセイを残しています。私はこのエッセイ集を3年前の入学式でも紹介しましたが、今日の国際化する社会で「他者」との出会いの持つ意味を考えるために、皆さんにも読んでもらいたいと改めて思いました。世界と日本の伝統から環境、自然、さらには社会問題に至るまで、敏感に反応する武満さんの感受性の鋭さ、思索の深さに驚かされます。音楽好きの人でなくとも、引きずり込まれるように読めること、請け合いです。

三冊目は、池澤夏樹さんの小説、『カデナ』（新潮社）です。池澤さんは理学部と工学部が分かれる前の本学理工学部で物理学を学ばれた方で、芥川賞はじめ主だった文学賞を総なめにされた小説家であり、詩人であり、文明評論家であります。この小説のタイトル、「カデナ」とは、言うまでもなく沖縄の米軍基地ですが、ベトナム戦争が激しさを増した1960年代の終わりに、この基地を舞台に4人の男女が行うようになったスパイ活動を物語りにして描いています。こうすると軽い小説のように見えるかもしれませんが、現在の普天間基地問題を含め、沖縄の諸問題を考える上で、大変刺激となる骨太の小説です。分厚い本で、楽に読めるようなものでもありませんが、皆さんには是非挑戦していただきたいと思います。

ところで、皆さんに心がけていただきたいことが、もう一つあります。他者と議論し、「多様性」のなかで自らを鍛えることです。先に挙げた読書も、専門外にまで広げて、多様な本に挑戦することが大事です。そのことによって、自分の知の輪を広げ、狭い専門に縛られた凝り固まったものの見方や考え方をただすことが可能になるのです。埼玉大学には日本全国から、生活スタイルも価値観も異なり、多様な考え方をもった人が多

数入学してきます。また、大久保キャンパスには5学部の全てがあり、専攻を異にする学生諸君がいつもまわりにいます。このように自分とは異なる知識を持ち、異なるものの考え方をする人と議論することを通して、「学び」を豊富にし、深めていただきたいのです。

日本社会のグローバル化の進展ということを踏まえると、日本人学生と留学生との交流も重要になっています。今、埼玉大学の学生は学部・大学院をあわせて約9000名ですが、うち450から500名が留学生ですから、お互いに知り合う機会も少なくないと思います。どうか「学び」の舞台でも刺激しあって下さい。

また、埼玉大学にはグローバル・ユース(GY)という名の特別教育プログラムがあり、その他各学部も留学を組み込んだ教育プログラムを充実させていますので、日本人の学生諸君はこれらを活用し、日本とは異なる環境に飛び込んでいって「学び」を深めてほしいと思います。今、秋入学が話題になっていますが、本学もその検討にあわせて、世界のどこでも通用するようなグローバル人材の育成を目ざし、教育改革に着手したいと考えています。

3・11後の日本は、近代文明の転換と言われるほどの、大きな転換が必要な時期に入っています。また、世界には、解決を求められている問題が山積しています。私は、大学における学びの特徴について述べてきましたが、こうして培われる、考え抜く力こそ、転換期にある21世紀社会を市民・職業人として逞しく生きる力の源泉と言わなければなりません。変革を担うのは問題発見型、問題解決型の人材だとよく言われますが、私がいま話しましたことから、自ら問い、考え抜くことを基軸とする大学における「学び」の繰り返しが、そういう人材を育てることも明らかでしょう。

大学時代の4年間は、皆さんが自立した生活を営むための準備する期間であり、そして、自立に向けて失敗を含め自分を鍛える余裕を与えられたという、恵まれた時期にあたります。とくに震災を契機にして「日本人の生き方や、社会のあり方を変えていく必要を感じるようになった」という人に言いたいと思います。これからの4年間、埼玉大学で思う存分「学問」して、力を蓄えてください。

さて、私は学長に就任しました4年前から、埼玉大学に学ばれた諸君の先輩を入学式にお招きし、特別講演をお願いしております。今日の入学式には、公立大学法人静岡文化芸術大学文化政策学部准教授の溝口紀子さんをお招きしています。溝口さんは本学の教育学部および大学院教育学研究科在学中に女子柔道の選手として2度のオリンピックに出場し、1992年のバルセロナ大会では銀メダルを獲得されました。このほか多くの大会で優勝して女子柔道界の第一線で活躍され、現役引退後は指導者として女子柔道界に貢献してこられました。きっと、興味深いお話をしていただけるとと思いますので、皆さん、期待してください。

最後に、皆さんがこれからの四年間、目標を高く持って、研鑽を積み、逞しく成長されることを祈念し、私の式辞といたします。

皆さん、埼玉大学へのご入学、おめでとうございます。

平成24年4月6日

埼玉大学長 上井喜彦